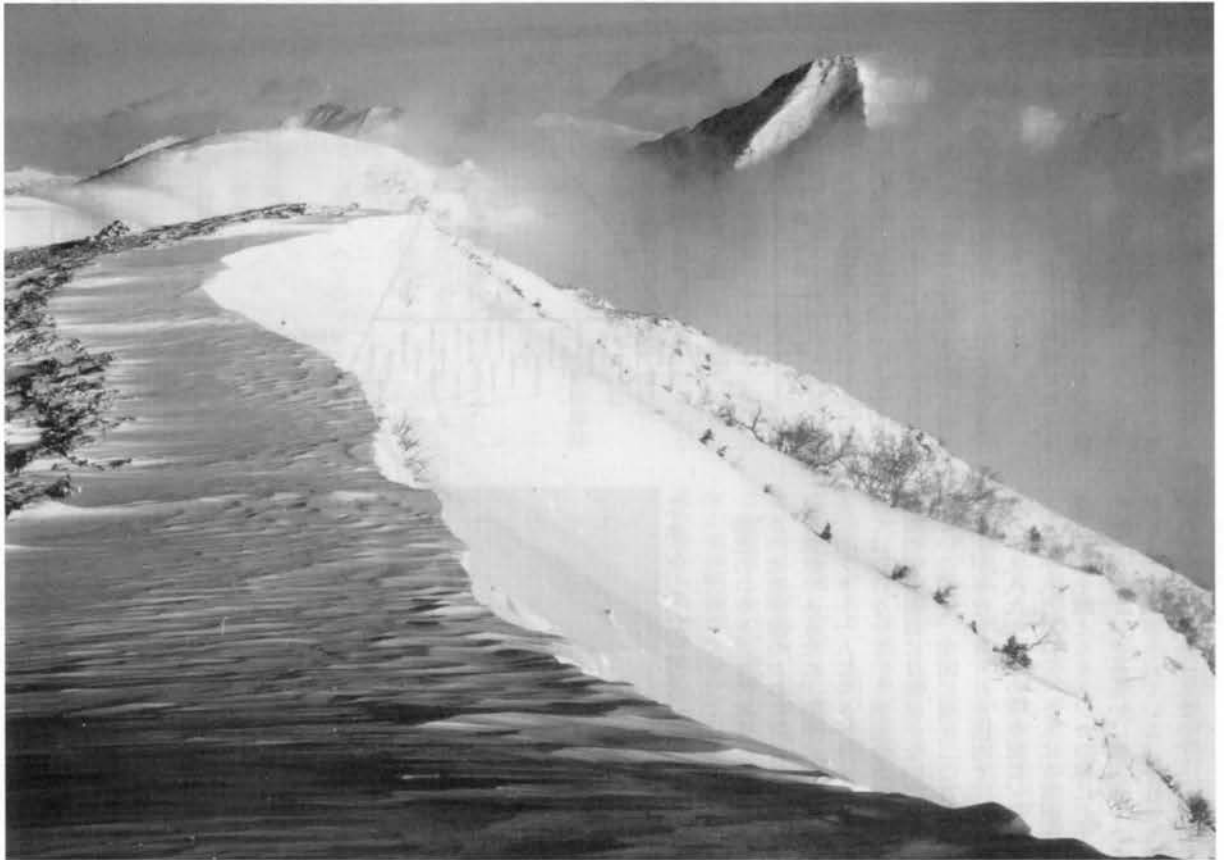


山と博物館

第39巻 第3号 1994年3月25日

大町山岳博物館



厳冬の常念岳（H6.1.5蝶ヶ岳にて） 飯塚知宏

厳冬の蝶ヶ岳紀行

冬の蝶ヶ岳、前回は二年前で、上高地から横尾の急斜面でのラッセルに泣かされたが、今回は元旦に三股から登ることにした。というのは、仕事の関係もあったが、カメラ機材が重く、その他の荷を最小限に抑えても総重量が三十五kg程になってしまったので、人のラッセルを利用し少しでも楽に登ろうと考えたからだ。

車から降り一時間半程で三股に着いた。そこで三人の登山者に出会った。その内二人が常念岳、一人は蝶ヶ岳に登ることを耳にする。私は冬の三股は初めてなので内心強く思った。二十分も歩かないうちにトレースがなくなった。雪も思ったより深い。不安がよぎったところでザックを下ろし、同行することになった大阪の小林さんと初めて会話らしい会話をした。聞くところによると冬の北アルプスは初めてだということ。そこで、お互いに無理はしないで行こうということで見解が一致した。当然の事だが進む程積雪は多くなり、おまけに雪がバラついてきた。交代でラッセルするが予想していた以上に厳しい。初日は標高千八百m、豆打平で幕営。平成六年元旦の夜を過ごすこととなった。

二日目。予定ではこの日のうちに小屋に着くはずであったが、降り続く雪の中、午後三時、二千三百m付近で幕営。

三日目、前日と同じく七時半出発。蝶ヶ岳ヒュッテの中村さんに元旦入山を連絡してあるので、今日中には着かないと心配をかけてしまう……などと考えつつ足を進めた。午後二時半に小屋に着き、思わず小林さんと握手を交わした。窓からは「飯塚ちゃん大変だったね、お疲れさん」とコンタツツさんの声。中村さんからは熱いコーヒをいただいた。旨かった。体の芯から温った。

元旦に入山し五日の朝下山するまでの間にわずか一時間半程しかシャッターを切るものが出来なかったが、蝶ヶ岳ヒュッテのみさんと酒をくみかわし、楽しい正月を過ごすことが出来、登って良かったと心から思った。

（日本山岳写真真協会 松本支部）

今、考える、カモシカ問題

東 英 生

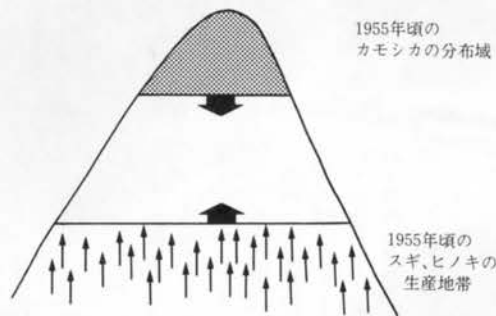
カモシカがもどってきた道

国は、一九三四年（昭和九年）にカモシカを天然記念物に、そして一九五五年（昭和三十年）に特別天然記念物に指定し、狩猟規制を強く行った。毛皮等の販売などについても取締りを併行して行った。当時のカモシカの分布域は高標高地の一部に限定され、文字通り幻の動物であったことは、いろいろな山岳関係者から聞き及ぶところである。岐阜の小坂町の猟師が、一九七〇年頃に山でカモシカを見た時、それがカモシカだとはわからなかったと教えてくれたことが印象的だった。特別天然記念物に指定されてから四十年たった今日、カモシカの分布域は拡大し、岐阜、長野、愛知など、地域によっては林業被害が発生し、カモシカへの風当たりが強い。

カモシカによる林業被害は、一九五五年に特別天然記念物に種指定されてから二十年経過した一九七五年以降に下北半島、岐阜、長野を中心に問題になりだした。その間の経緯を簡単にふりかえってみることにしよう。

図は、一九五五年以降、スギ、ヒノキの生産活動が活発化し、人間の活動の場が山麓帯から低山帯に這い上がっていったこと、法的な加護を受けてカモシカの生息分布域が亜高山帯から低山帯に下降していったことを示している。一九六〇年以降の十五年間は、薪炭から石油へのエネルギー革命によって、日本

1955年頃の
カモシカの分布域



列島の自然が徹底して改造されていった時代である。日本列島のいずこに行ってもブルとダンブが動きまわり、チェーンソーがうなりをあげていた。ブナ林がつつぎとなぎ倒されていた時代が一つの区切りを迎えるとき、図の矢印が衝突していったのである。

一九六〇年代には、森林の伐採にエネルギーが注がれ、伐採に植林が追いつかず、伐採地群落（これは森林を伐採したあとに、植林をしないで、そのまま放置した林地をさす）が急激に増加していった。そのような場

所ではカモシカが生息しても生産者側からクレームが出ない状況が存在したが、そのことはカモシカにとって、一時的にきわめて好都合であった。そんな折、カモシカに対して法的に厳しい規制がしかれ、保護されたことが相乗し、その効果の甲斐あって、四十年たった今日、カモシカの分布域が大きく拡大したものと考える。

つまり、生産者側の理解があった上で鳥獣行政が円滑におこなわれていた結果を反映しているものではなかった。北アメリカでは一八〇〇年代には数万頭にまでなっていたシカが一九〇〇年代に入ってから回復していったといわれている。野生動物管理の、この上ない業績の一つとされているが、土地所有者が、理想的なシカの生息地を豊富に提供したという土地管理なしには、それを成し遂げることはできなかったといわれている。

ニホンジカの被害対策

最近のニホンジカの被害対策を見てみよう。シカの被害防除のために防鹿柵を造る。オスは狩猟対象であるため、猟期には狩猟対象となる。ハンター一人につき一日一頭までしか撃つてはいけないという制限はあるものの、地域毎の捕獲頭数には制限がない。少なくともひとつは、全国に現在二〇万人以上のハンターが存在する。日本国内で、一九八七年から一九八九年までの三年間に、猟期中にオスジカが八万頭以上、さらに有害駆除では一万二千頭を超えるオスジカの他に七千頭余りのメスジカがワナあるいは散弾銃やライフル銃によって捕獲されている。それでも被害問題はいつこうに解決しない。



夏のカモシカ

そこで、狩猟圧を高めて個体数密度を激減させようとしている。シカの被害問題地域では、まずシカの狩猟を禁止していた地域の狩猟禁止を解除し、有害駆除許可頭数の枠を広げる。有害駆除の実施地区の中に保護区、休猟区を認め、メスジカを許可に含める。さらに有害駆除だけでは保護区内のシカが減少しないと見ると、保護区の指定を解除して猟期中にも捕獲ができるようにする。そしていま、メスジカの狩猟駆除をすすめる一方、被害地及びその周辺で、シカの生息密度の比較的高い地域では、個体数密度管理という名目で捕獲を推進している。（紙面での都合上抜粋し、御了承下さい。）

日本国内で、現在または近い将来に、シカ

がオス、メスにかかわらず捕獲の対象とならない地域は、宮城県の高城山を除いてはどこにもなくなってしまう。(実は高城山も、一年に十頭程度の間引きが行われているが、この地域は他の地域にはないブレイキを持っている。)

このような結果、シカによる被害問題が解決しないまま、シカの絶滅地域が虫喰い状況に発生していることなど、誰も気にとめようとしていない。しかも、千葉県をはじめとする数県では、昭和初期に県内でのシカの捕獲を全面禁止にして、やっと現在の生息分布域を確保していることを忘れていた。現在の生息分布地図は、野生動物の自然環境への適応の様子を反映しているわけではない。

カモシカも、ニホンジカのようにして良いのだろうか。私は、ニホンジカは、このままでは絶滅すると考えている。馬鹿なことを言うな、絶滅などする筈がない。その逆に強い狩猟圧をかけなければ、シカの生息地では林業、農業が壊滅的な打撃を受け、農林業に携わる人々の生活が成り立たない。生産林だけでなく、シカの増えすぎは自然林を破壊し、地形さえも残すことは困難であると。

シカやカモシカは野生動物であり、この両種とも純粋な意味での草食動物である。草食動物は、捕食者だけによってバランスを取ったり、狩猟圧によってバランスを取ったりするわけではない。(このことを詳細に説明するには紙面が少なすぎるため、説明は割愛する。)草食野生動物をはじめとする野生動物は、自然とのバランスの中で生息を維持するのであり、人間の目にとまった一部の現象を組合せ、人間の志向に合わないことを切捨てながら、人間の好む自然をこて先で作ろうと

するのはナンセンスである。

シカは何故絶滅するのか

明治から昭和初期までに、人間はカモシカを、シカを窮地に追いやった。

カモシカは人間の生息環境と重ならない部分を安定した生息環境として生活の場にする事ができたため、現在、シカに比べると連続した分布域を保有している。しかしながらシカは、人間と生息環境を同じくする部分が多く、高標高地で人間の利用空間との間をぬうように生きているため、きわめて不安定な状況下にある。それは以下のような理由による。①シカにとって安定した生息環境がほとんど残っていない(山麓部の自然林がない)

- ②狩猟圧が強かりやすくなっている
- ・ 農林業による被害対策としての有害駆除の推進
- ・ 銃の発達
- ・ 林道の延長距離が、昭和初期とは比べものにならない程伸び、整備されている
- ・ トランシーバーの性能の向上
- ・ 防寒装備の充実
- ・ スノーモービル、ヘリコプター等の一般化
- ・ 猟犬の質の向上
- ・ シカ肉等の経済化
- ③シカに対する偏見(個体数密度を低いところで抑えないと、高密度になり、植物をはじめとした自然環境が破壊されてしまうという間違ったマネージメント論の横行)
- ④モニタリングの不備(シカによる農林被害及びシカの生息状況の把握の欠如)

⑤監視体制の不備(密猟の横行)

シカの次はカモシカ

シカは農林業被害の増大につれ、それに対応し切れなくなった行政システムのために悪役に回され、現在厳しい生息状況下に追い込まれつつある。

カモシカについては、シカと少し状況が異なる。まず、特別天然記念物に種指定されていることであり、人間の生産活動の場とずれた高標高地に安定した生活空間をもっているということがある。しかし、シカの二番手になる要素も多い。高標高地で生活するカモシカの実体把握が手つかずのままであること、高い山から数十年ぶりにおりてきた低山帯の



春を迎えられなかったカモシカ

カモシカが、シカと同様に射殺により葬り去られるシステムができあがったことがその要素である。冒頭で述べた、伐採跡地群落に分布を拡大してきたような良い時代は二度と来ないと考える。特別天然記念物であるカモシカが、カモシカの意志に関わらず、被害を受けている人にとって手ごわい相手になってしまったからである。

カモシカにしろ、シカにしろ、射殺は、捕獲すれば被害がなくなるとの幻想の中のできごとであった。長野県や岐阜県のように、カモシカの射殺を始めてから十年以上が経過し、捕獲頭数が延べ一萬頭を越えているにもかかわらず、現在もおお被害問題が存在しているのである。

捕獲をすれば、個体数密度を減少させれば、被害問題が解決すると考えていた人の予測は今だに現実のものとなっていない。

私たちは、何も知らずに野生動物の命を正義という名で奪ってきた。自然の中で生息している野生動物に関して現在、何も知らない。何も知らないから黙っていけばよいわけではない。手を出してはいけぬものではない。無知が故に、良いと信じて行ったことも間違っている。

私たちはこれからもまちがいを起こすだろう。無知であることを悔い、間違ったことを認めて次に進まなければならない。今こそ私たちは謙虚さを忘れずにカモシカや自然と接してゆかなければならないのではないだろうか。

(哺乳類研究所準備室)

博物館だより



総合案内の贈呈式 (左 高橋寿常理事長)

資料寄贈ありがとうございました

- 登山装備 20品目 横浜市南区六ツ川 遠藤 由加
- 登山装備 21品目 城陽市寺田今堀 内田 昌子
- 伊藤孝一氏登山記録 3冊 (寄託)

山岳博物館の総合案内書が、日本生命財団の助成を得て刊行し、二月二十四日に贈呈式が行われました。博物館に三〇〇部、そのほか県内の小・中・高校・図書館などに八二七部が贈られました。館内の常設展示に沿って、日本の登山の歴史や山岳の自然などを一五の図版で分かりやすく解説してあります。B5判、七二ページ(カラー五〇ページ)。

総合案内書は博物館で一冊七〇〇円で販売しており、その売上げ金は重版の財源として充てられます。

郵送希望の方は一冊一〇一〇円(送料込み)で販売しています。

- ピッケル 49点 東京都三鷹市 伊藤都留子 書簡等 27点 (寄託) 町田市鶴川 平柳 一郎
- 畦地梅太郎 版画 1点 大町市常盤清水 金田 国武
- 登山杖他 3点 静岡市与左エ門新田 佐久間正治
- ヤツケ 2点 大宮市植田谷本 山本 宗彦
- 伊藤孝一氏スチールカメラ他 7点 東京都三鷹市 伊藤都留子
- 紙靴・ピッケル 2点 東京都大田区西馬込 戸谷 光男
- 登高帳 7点 大町市平鹿島 狩野 正明 (寄託)
- 日本山嶽志 1点 東京都三鷹市大沢 志村 濟美
- ピッケル 1点 川西市蒼台 平林 克敏
- 日本・中国ナムチャバルワ合同登山装備 (91年) 22点 尼崎市武庫之荘東 重廣 恒夫 ねごさ・魚びく・たも等 12点 (寄託) 大町市社常光寺 曾根原文平 カモシカ剝製 3点 (寄託) 助日本カモシカセンター
- 登山装備(グランドジョラス北壁使用) 4点 流山市南流山 堀口 勝年
- 登山装備 10点 登山記録帖 5点 埼玉県日高町武蔵台 小西 政継
- 登山装備(ジャヌー北壁使用) 15点 川崎市宮前区有馬 竹田 幸司
- 登山装備(ジャヌー北壁使用) 3点 登別市鉾山町 河上 清美
- 背負子・わらぞうり等 4点 大町市相生町 黒岩 数弥
- 登山装備(マッターホルン北壁使用) 1点

- 練馬区豊玉中 遠藤 二郎
- 岩石標本 228点 松本市元町 田中 邦雄
- スキー用具 3点 大町市社 原 成弘
- 登山装備(ロッツェ遠征等) 大町市上草柳 福島 正明 (敬称略)

「山と博物館」購読料金改定のお知らせ

本年一月より郵便料金が改定されました。このため送料増額分として四月一日より年間購読料の値上げをさせていただきます。なお、三月末日までに新規で申し込まれる方、または前もって継続納入される方は、現行料金で受け付けいたします。

新料金
「山と博物館」四月号(39巻第4号)より年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
観覧料改定のお知らせ
平成六年度(四月一日)より、山岳博物館観覧料が改定されます。

新しい観覧料は次のとおりです。

区分	個人	団体(30名以上)
一般	四〇〇円	三五〇円
高校生	三〇〇円	二五〇円
小・中学生	二〇〇円	一五〇円

山と博物館第39巻第3号
一九九四年三月二十五日発行
発行所 千歳長野県大町市 TEL 〇二二一
大町 山岳博物館
印刷所 長野県大町市後町 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、二〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 長野四一三三一九三